

追悼 ひろたまさき先生

In Memory of Masaki Hirota

岩崎 稔

IWASAKI MINORU

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

キャロル・グラック 日米共同研究

Keywords

Carol Gluck; Collaboration between US and Japan

原稿受理日：2021.2.10.

Quadrante, No.23 (2021), pp.103–104.

歴史家ひろたまさきさんの訃報がわたしたちのもとに届いたのは、2020年初夏のことであった。ひろたさんは、北海道教育大学、岡山大学での教歴を経て、大阪大学文学部の日本学講座の教授として長く活躍され、さらに定年後はいくつかの私立大学でも教鞭をとられて、多くの学生を育てられた。福沢諭吉研究や差別論を中心とした歴史研究により、またつねに人を逸らさないお人柄により、広い意味での「民衆史研究」の潮流に数え入れられる研究者として評価と尊敬を集めてきた。

振り返れば、わたしたち東京外国語大学海外事情研究所を拠点とする研究チームは、長年にわたりひろたさんと交流があった。その端緒は1990年代半ばに遡る。当時東京外大の社会学講座の教授であり、「総力戦体制論」という最新のテーゼを果敢に世に問うていた山之内靖名誉教授や、氏の周りに集まっていた伊豫谷登士翁教授らの研究者集団とのコラボレーションがそれであった。山之内教授は、自身のテーゼをたんに個人の主張として提示するだけではなく、アメリカの最先端の研究者

との厚みのある、しかも対等の共同研究体制を構築するという、人文社会科学では当時はまだけっして一般的とは言えなかった新しいスタイルを模索しつつ問いかけていたが、そこにひろた氏は、氏自身がまとめ役を果たしていた西川裕子氏、平田由美氏、富山一郎氏、長志珠絵氏などを中心とする関西の優れた研究者グループとともに合流してきた。その際、アメリカ側の研究者集団で中心的な役割を果たしたのは、コロンビア大学のキャロル・グラック教授やコーネル大学のヴィクター・コシュマン教授、ブレット・ド・バリー教授、そして酒井直樹教授であった。こうした国際ネットワークの構築により、歴史学、思想史、社会科学、文学研究、経済学、政治学、メディア学などの多様な研究者が、その問題意識や疑問を忌憚なく交換できる空間が開示され、そこからは、その後長きにわたって実に多様な研究成果が生まれ出た。海外事情研究所の一連の科学研究費を活用した研究プロジェクトや、Workshop in Critical Theories = WINCという学際的な研究会もそれと深くかかわって



いる。そうした成果の一端は、たとえばひろたさんとグラック教授が監修者となり、東京大学出版会から2006年に公刊された『歴史の描き方』全三巻にも表れている。そこに収められた諸論考に共通しているのは、歴史叙述という営みに対する再帰的な問いかけと、冷戦体制に呪縛された地域研究やナショナルヒストリーを乗り越えていこうとする意志であった。

2020年11月22日に、日本女子大学の成田龍一名誉教授とグラック教授の呼びかけで、ひろたさんを追悼しその業績を振り返るという意味をこめて特別ワークショップが開催された。Zoom meeting を利用しての会議であったが、日米のさまざまな大学の40人を超える研究者が参加して盛会となった。討議の共通テキストとして選ばれたのは、「日本近代社会の差別構造」というひろたさんの1990年の論考である。それはこの論文がすでにド・バリー教授によって英語に訳されていたためでもあった。岩崎稔の司会のもと、ワークショップの発案者であった成田龍一教授と、本学の小田原琳准教授とがそれぞれ報告を行い、その提題に触発されて、差別される身体、レイシズム、ジェンダー、そして今日の社会的分断やBLM運動をめぐって、熱心な討議が繰り広げられた。ここに、報告者であった小田原氏と成田氏の原稿を掲載し、ひろたさんと海外事情研究所との実り多い交流の記念としたい。

(2021年2月10日 岩崎 稔)